山城志

第 1巻 1号

備陽史探訪の会

城郭研究部会々報

掛迫城と法成寺氏

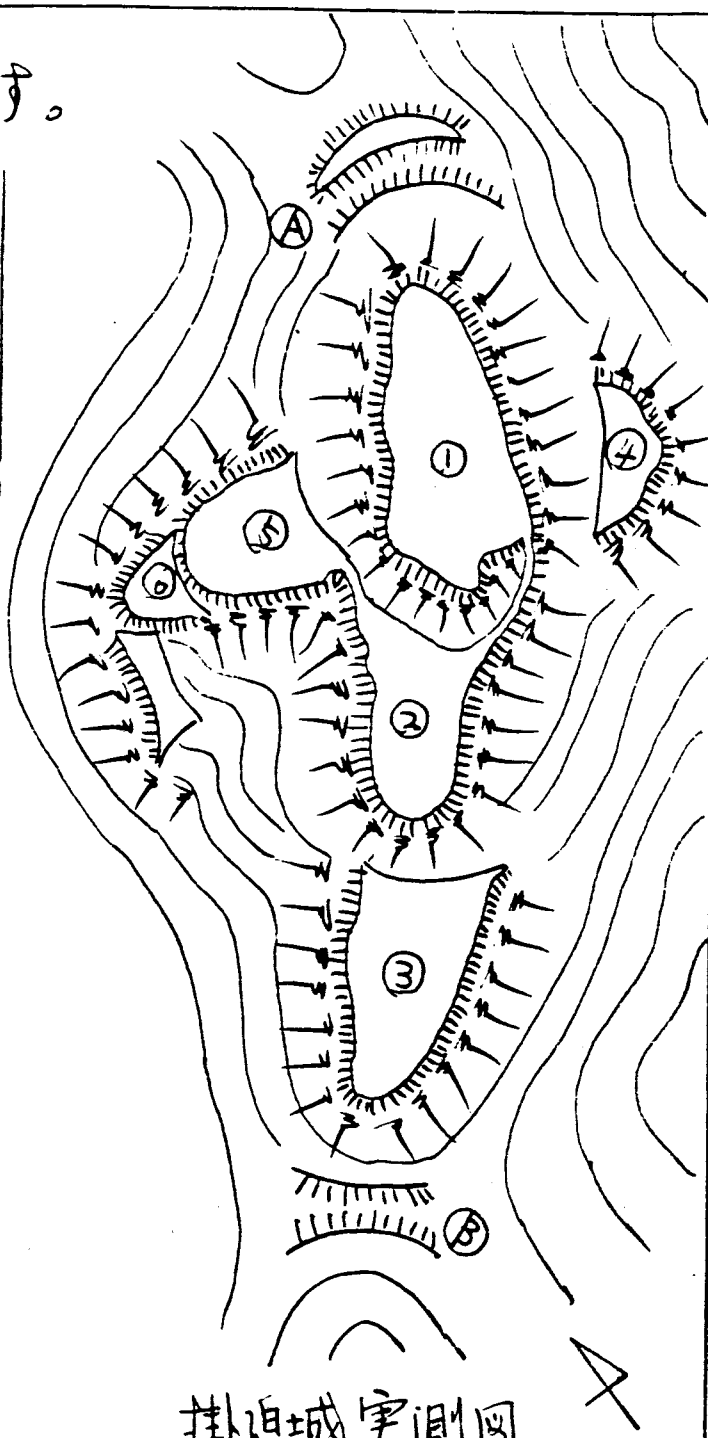
田口義之

現在の福山市駅家町法成寺字掛迫に掛迫城と呼ばれる山城址があるのをご存知でしょうか。今から4、500年前の室町時代に法成寺氏（ほうじょうじうじ）という武士が住んでいた城です。今回はこの掛迫城と法成寺氏について述べてみたいと思います。

まず、掛迫城ですが前記のように今の駅家町にある山城のあとで現在でも城があったとおぼしき平地や堀の跡が残っています。（図）図で①としてある不整形の平地が後世本丸と呼ばれる城の中心です。高さも麓の田んぼから30M位あり城で1番高いところです。そして①を守るために作られたのが②③④⑤⑥の各平地です。実際登って見ると守りやすいように①から順々に低く作られて

いるのがよくわかります。

以上の①から⑥までの平地のことを曲輪（くるわ）と呼びますが、これは城にこもったりするときに武士達が住んでいたところです。現在では残っていませんが昔はこの平地の周囲には矢ハザマをうがった塀が廻らされ、要所には矢倉が青空に向ってそびえ、内には武士の寝越起



掛迫城実測図

縮尺　千分の壱

0　20M　50M

田口美之作図

きする家が建っていたのです。 Ⓐ とⒷは空堀りといって水の無いお堀りです。 これは城に続く尾根づたいに攻めてくる敵兵を防ぐために作られたもので山城にはたいてい有るものです。 以上、武士達が自分達の身や家族、所領を守るため、ずい分苦労した

掛迫城址遠望（南より）

跡が良くわかりますね。 山城とは大体このようなものです。

次に掛迫城の城主だった法成寺氏について述べ

てみましょう。　中世の武士達は領地を支配するために一族の者を領内の各地に住まわせましたが、その場合、一族の者は本家の氏を名乗らず、住んでいる所の地名を名字としました。　おわかりでしょうか、この法成寺氏も駅家町の法成寺に住んだから「法成寺」氏なのです。　「三吉氏系図」によりますと藤原行成、あの有名な平安時代の三筆の行成ですが、この人の孫にあたる兼秀が中宮大夫に任ぜられたので「中宮大夫」の宮をとって「宮氏」を名乗り、備後国に居住して武士になります。　これが備後の豪族宮氏の始まりなのですが、この兼秀の次男に兼能という者がいてこの人の四男の秀政が始めて法成寺村に居住し、法成寺新次郎と名乗ったのが法成寺氏の始まりです。鎌倉時代の初めのことです。　もちろん　これらのことが真

実かどうかは他に証すものが無いので何とも言えません。ただ備後の大豪族宮氏の一族で法成寺に住んだため法成寺氏を名乗ったことは確かなようです。戦国時代の文書によれば法成寺兵部大夫を宮兵部大夫とも言っていますので宮氏の一族であることがわかります。

鎌倉時代、荘園の地頭として各地に根を下した武士達は建武の中興が失敗におわり公家達の力が衰えていくと荘園をだんだん侵略してしまい力をふるうようになります。そして、足利尊氏が京都に幕府をひらく頃になると荘園は名ばかりとなり武士の世の中になります。

この頃になると備後の武士達の名が史上に現れ、活躍の様子も次第に明らかになってきます、福山の周辺でも宮下野守兼信が、太平記の各所に登場します。しかし、残念ながら法成寺氏の名は出て来ません。おそらく本家の宮兼信の下で戦っていたので

しょう。法成寺氏の名が初めて歴史上に現れるのは応仁の乱、そうです室町末期、京都を舞台に東軍細川勝元方と西軍山名宗全方の大軍が争ったあの戦いです。この時、応仁元年、京都相国寺お花の坊の大合戦で法成寺尾張守は西軍山名宗全に属し、渡辺信濃守家（福山市草戸にいた武士）と戦って一族の七郎次郎という者が家に討取られています。山名宗全は当時備後の守護ですから法成寺氏は山名氏の家臣となっていたのでしょう。その後は又、史料がとぎれ、次に現れるのは戦国時代の天文年間です。当時、中国地方は山口の大内氏、出雲の尼子氏の勢力争いがくりかえされ、その間に安芸の毛利元就がじっくりと力を蓄えていた頃です。この頃、法成寺氏は尼子氏に属しています。これがなぜわかるかというと、当時、真宗の大本山本願

寺（当時は大阪にあり石山本願寺と呼ばれた）の法主証如上人は尼子氏の動きが気になってしかたがなく、尼子氏に近い備後山南の光照寺を通じて尼子方の豪族に手紙を出しているのですが、だれに出したのかというのが証如上人の日記が今も残っていてわかるのです。そして、そこに宮法成寺尾張守（前の尾張守の子孫）の名が見えるのです。福山と全く関係がないような大阪のお坊さんの日記に法成寺氏の名が現われてくる、歴史は面白いものですね。　ところでこの日記によると法成寺氏は備中（今の岡山県西部）にも領地を持っていたようです。他の文書ですが永禄元年、法成寺三郎左衛門尉将言という人が重玄寺（備中吉井）幸福庵に銭を寄進しています。この将言も法成寺氏の一門でしょう。　さて、いよいよ大づめです。法成寺氏の滅亡について語らねばなりません。

前に法成寺氏は尼子方だったと述べましたが、これが命取りとなったのです。尼子氏は経久の代までは経久の力で大勢力を保っていましたが　孫の晴久の代になると晴久が余り大した人物ではなかった為次第に落ちめとなり遂に毛利元就に滅ぼされてしまいます。法成寺氏は晴久の代になっても尼子氏から離れなかったようです。最後の当主は宮(法成寺)兵部大夫勝信と伝わっていますが勝信は先が見えなかった人なのでしょう。　毛利氏は大内氏と協力して尼子方の神辺城を天文18年9月に攻め落します。神辺は法成寺の近くですから敵は眼前にせまっています。しかし、勝信は尼子を離れません。そして、天文~~十~~19年5月28日、大内毛利の連合軍の攻撃を受けています。この時はまだ落城には至らなかったようです。しかし、最後の時はやって来ました、天文21年7月のことです。この月、毛利元就は長男の隆元、次男の

吉川元春、3男の小早川隆景などうよの余の兵を引き連れて、備後に攻め入り尼子方の宮氏を攻めました、そして、この時、掛迫城も毛利の大軍に攻められたのです。合戦のくわしいもようはわかりませんが勝信は戦死し、法成寺氏は滅んでしまいました。そして掛迫城も勝信の家臣によって焼きはらわれたということです。世は戦国時代です、ちょっとした先の読み違いが身の破滅につながるのです。

以上、掛迫城と法成寺氏についてわかるだけ述べてみました。もし、機会がありましたら現地に行ってみて下さい。現在、地元の人によって案内板が麓に立っていますので直ぐわかると思います。

（おわり）

昭和五十七年12月4日記

FUJICOLOR CD 81

FUJICOLOR CD 81

（注）出来るだけ原本の体裁を尊重したが一部旧漢字は当用漢字に改めた。

西村大町山	福田兵庫頭	田島村	同名又左衛門尉
山手村	杉原伯耆守	常石村	村上左近大夫
郷分村	皆内出雲守	浦崎村	下見右近
同	佐和越後守	同	高須筑後守
佐和村	名倉雅楽頭	同 関屋	杉原河内守
古神島	真木島玄蕃充	高須村	古志三郎左衛門
沼隈郡		同	同 大和守

（福山城鏡櫓古文書館浜本文庫本による）田口義之

資料紹介

備後国福山御領分古城記（壱）

中に入ります。内容も書入れが少なく比較的原古城記に近い信用できるものと思われます。備後古城記の異本の一つで寛文四年（一六六四）の奥書をもち古城記の部類では古写本の

同　下　工藤和泉守
（矢クリ城　工藤祐経末流）
同　中　石浦城　同名修理大夫
同　同名備前守
上山南村　木立城　桑田式部大輔
草深村　蒲冨　未流　岡崎平大夫正実
同年守ル
慶長五年より元和五年迄居住也
村上河内守
左衛門大夫家老
貞和五年より西国之探題職也
鞆津　足利右兵衛佐直冬
百島村　同名喜兵衛

帝村　小川大膳亮
深津村　長尾主計
深津郡
草戸村　渡辺信濃守
今改地頭分ト二ヶ村ニ分ル
墓石地頭分福成寺ニアリ長和之内
同　同名備前守
長和村　三谷豊前守
（平ノ貞盛末流）
同上　同名出雲守
山田村中　渡辺信濃守
（融大臣末流）
同郷城　田中河内守

中津原村　羽賀彈正
千田村　平賀安芸守
坪生村　坪生兵部
野々浜村　藤間十郎
大門村　岡志广守
望房山城主望房大明神ト号ス
同　望房某
引野村今ハ畠也塩飽大力
手城村　此城山引野村之内近代手城ニ有由
滋野左近

竹田村　皆内左馬之助
杉原播磨守
同　望房輔忠興
神辺　山名宮内少輔氏政
楓山　山名師氏未流先主
安那郡
退散ス　今改岩成村ト
破却ス家臣川田馬場守岡其外侍多ク窄ス其後尼子之旗下ニ附落城ス城ヲ焼拂
延元年尊氏ヨリ岩成之庄ヲ賜フ代々領地
宗岡村　宗岡播广守

西中条　宮次郎左衛門

宮若狭守領地今改徳田村ト

曽祢原村　山名清左衛門

名丹下以下討死軍人退散ス
氏子孫断絶家臣高尾江草小林笛原山
梅之木ヲ以為墓因名曰フ中戦山宮
神辺杉原左エ門ト相戦此宮氏戦死ス

中条　同　若狭守

湯野村　持城　宮次郎左衛門

天文廿一年先利ニ攻ラレ没ス

同　下　宮入道光重

同　茶磨山　穴戸孫六要安

上御領村　滝山佐渡守

同　三好丹波守

中野村　家臣宮氏持　栗木兵部近氏

同　梨羽中務丞　景盛

栗根村　栗根長門守

同　焼掃破却ス戦死ス子孫断絶

同　高尾丹下其外討死軍人城

同越後守高音

北山村　宮　次郎左衛門　持

山野村　宮　若狭守持

三谷村木ノ上　金尾遠江守

金尾代々之寺金尾山童花寺

同東　同　若狭守

同　　菜原縫殿介

東法成寺村　宮兵部大夫勝信　子孫断絶寛永年中城ノ文字ニ改ルヤ宮氏代々之居城　勝渡城同時ニ戦死

小井ノ城カケ迫賀茂村境ニ有之

同　高山

百谷村　宮治部大夫勝岡　死一類断絶ス　沼也落城之後田地トナル尼子幕下ニ付戦

下賀茂村山　宮正味斎　宗岡賀茂村境　城山南ハ往来西北東之方　勝渡

同　岡本何某　吉田何某家臣

同　内藤伊賀守

大下村　同人

広島　高田河内守正重

真鍋島　真鍋宇右衛門　北木トモ

北木島　喜多木八郎

同　池田主殿

神之島　小見山治部　後醍醐天皇御宇元弘年中ノ頃ノ人ナリ

同　須山備中

同　村上八郎左衛門

笠岡　小見左衛門

備中小田郡

つづく（続く）

木之上城と古代山城

七森義人

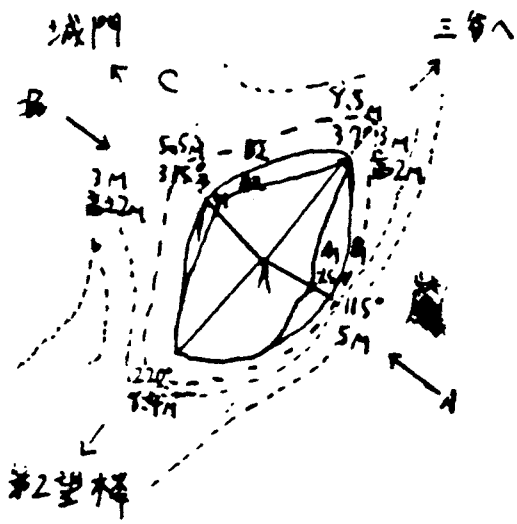
深安郡神辺町大字東中條と三谷に跨がる山で、標高329.4m有り、山頂に神社が祀られている。
山頂の神社西南下方に郭が有り、此より瓦を多量に出土し、此を山岳寺院の跡とされている。

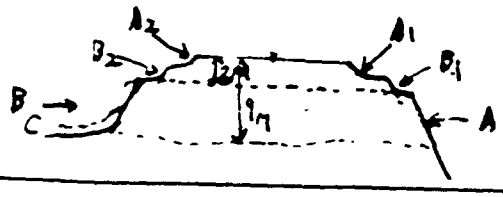
上木之内の砂防ダムを右に見ながら北北東に向って登ると、讃岐畑城と木之城の間の稜線に立つ、此より右へ(南東)向って登ると岩石が登り道を防ぐ様にして立っている。此を第1地点、(第1城門址)と仮称する。此岩は高さ2~3m、幅もほぼ同じくらいで、稜線の真中に立ち道を防ぐ、此岩を迂回する様に右に進み、前面の岩と後方の岩との間を登る。しばらく登ると山頂の神社に出る。山頂の西南下方に郭が有り、此から瓦が出土する、此を第2地点と呼ぶ、此第2地点へ降りた道を更に進むと、急傾斜となり、岩石が(大きさ2m四方)2、3個有り、此上に上がると望楼の様に見通しが效く。

なお、山頂より第2地点に降りる道の右側(北西)に神籠石状(石の大きさはさほど大きくなく、大きいものでも40cm程で、普通は20～30cmぐらいの列石が4～5個並んで有った。此第2地点は真中に途中から谷川が流れた様に崩れて石(50cm位ぐらい)がころがっているので、水門の崩れた跡ではないだろうか、第2地点の郭内側に進むと一段下って平地が有り、果樹園でも有たかの様に見受けられる、この場所はずいぶん広く、後述する第2望楼の処まで続いている。此平地を第3地点と呼ぶ。此第3地点に降りずに南側に行くと、突立端に自然石[redacted](0.6～1.2m多くぐらい)が郭の石垣の様になっていて、一ヶ所石が無くなっているが、此は城門としてないのであろうか、石がころげ落ちたのだろうか、この下には石が多くころげおちたと云う方が多いと思う。

神社より南南東に向って進むとすぐ少し凹んだ処が有り、此を第4地点又第2城門跡と仮称する。しかし、此は谷三谷に向って左右に分れて道が有るが、城内(第3、第2地点へ向うと思われる下の平地第5地点と呼ぶ。へ行く道が無いので後述する第6地点がどちらかと云えば城門であろう。この第4地点に石が2個(1個は立っていて長方形をしていて、高さ60cmぐらい、巾30cmぐらい、長さ1mぐらい又もう1個は小さい(40cmぐらい)有る。此第4地点よりしばらく稜線に沿って行くとすぐ第6地点

と呼ばれ、第3城門跡と仮称した処に着く、此処も三谷に向って、左右に道が分かれて有るが右側の道をしばらく進むと 右側の崩に 40cmぐらいの石列が有る。此第3城門跡は三谷と反対側(木之内・城内)第5地点へ行く道が有る。第6地点より_稜線に沿って行くと 左側より道が合流する。(此左側の道は しばらく行くと道が無くなってしまう、しかし無理して進むと第6地点より三谷に行く右側りの道に合流する。)更に稜線に沿って行くと第1望楼跡と仮称する第7地点に出る。此望楼は稜線より極端に高く、すぐ下では見上げる様になり、又、此望楼の上は大きい岩石が並んでいる。此より三谷へ行く道をしばらく降りると 右側に広い道(1.5Mぐらい)の道が有り、なぜか、此道は山の中に一部だけ広い道をつくった様に此

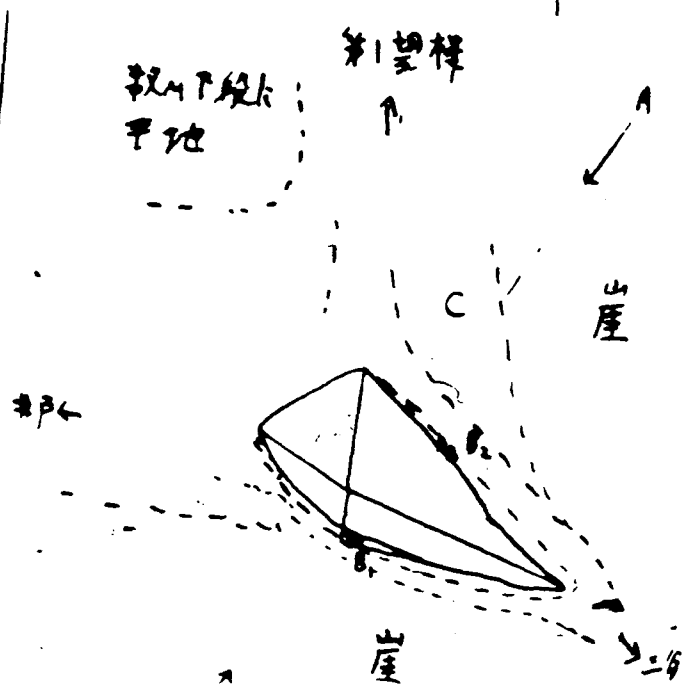




A1 A2 土の崖れ
B1 B2 討者走りの道と
C 郭(土塁)

広い道は三分まで続いてなく、此合流した処から下は
仕頂斜の急な獣道で、此広い道を上に上がると 第7地点の
下方(南東側)に出、此より又狭い道になっている。此第7地点
より稜線に沿って南西側に進むと、第8地点、第7地点より
20m位の処で凹んでいる。此には三分側に神籬石
状の石列(石の大きさ1m位だが、自然石の様に思われる)が有
り、なぜか、長方形に切った墓石の様な石が数多く見受けられる。
此第8地点より西側に低い平地が有るが、此は第5地点と
同じ平地で有り、此をそのまま真すぐに西に向えば、第3地
点に出るが藪が多い。此第8地点より南西に向うと 稜線の
東側に道が有るが此を真すぐに進むと第2望楼の南東の
方に出るので、稜線上に上がり、真すぐ行くと 高さ2m位の第2
望楼に出る。此は第1望楼と違い、石がほとんど無く真中に
石が1個、東端に石が下方に向って続いているという程度で
ある。此を
第9地点と
する。

A1 A2 土の崖
B1 B2 谷巻きの小道
C 溝



コクヨ コピー-SD (64×44)

此第2望楼の南側の崩に20cm～30cmぐらいの石で石垣状になっている処が有る。此第2望楼から西へ進むと一段下がって井戸の様な処第10地点に出る。此は井戸とも、煙火台とも火薬庫とも何とも不明で御座。此より城内(第5、第3地点)へ行く道が有る。此より更に西方に進むと、郭の広さが段々と広くなって来て、石礎石が2個ほど有った。(石の大きさ40cmぐらい) 此より更に西方に進むと数段下って井戸の有る処に出る。しかし、数段下がるよりも少し前に右に(北方)に向って第3地点と続いている郭に出る。此を更に西方に行くと井戸を左手に見ながら進む。そして、しばらく行くと石礎石(30～50cmぐらい)が4～5個並んでいる。此郭を更に西南方に行くと岩石(1～2mぐらい)で郭の端を守るように並べられて、その岩石を通ると空堀が有る、更に西南方の郭(高さ2～3m)に登ると山の端に出て成玉山等が見え、望楼の様な感じがする。此、郭にも石礎石が数個有る。此郭を第11地点と呼び、井戸を第12地点と呼ぶ。此郭より南に空堀をはさんで郭が有り、その南端に岩石(2～3mの広さ)が数個有る。更に此郭より南に岩石が露出している小さい郭が段々と下りながら並んでいる。第12地点の郭より西方下段の郭の西端近くに、神籠石状(石の大きさ40cmぐらい)の石が10個近く並んでいる。此郭より西方下段には郭はもうないがしばらく行くと小さな祠が有る。

なお、瓦を採取した郭と、第2望楼の間に有る郭(第3、第5地点)は藪がひどく詳細な調査が困難で有るが谷川が流れ、

その付近に石がごろごろとしているし、その[redacted]両側の崩にも神籬石状の列石(石の大きさは40cmぐらい)が有り、水門の跡の可能性が強い。又、此は果樹園になっていたのであろうが石垣で一部を囲んでおり、平地もずいぶん広いが、昔からこの様になっていたのを利用したのではないだろうか。

此では木之上城を古代山城として考える説としてこれを書いたが、石列と云っても、人工か、自然か、年代が何年で有るか等、素人であるのでとてもわからないので、すぐさま、古代山城と断定は出来ず、まるっきりでたらめで有る可能性が強い。

又、此を読んで木之上城へ行こうと云う人は、藪がずいぶんこんでいるのでそれなりの服装と秋は松茸の地域が有ると思えて一部立入り禁止なので、その点を御留意願いたい。

木之上城
石垣

山城の一生

吉田和隆

優勢な敵と平地に戦っては、敗れるは必定。居館の背後の山に籠って敵を防ぎ、味方の来援を待たむとする。だが山の斜面では寝起きも儘ならぬ。山の頂を削って平地(郭)を造り、周囲に柵を巡らし門を設け、起居の場とした。山城の誕生である。

館地は増へ、家臣も増した。城の拡張となる。山の稜線に沿って、細長く郭を新たに作り、以前の郭を本丸、新たな郭をニノ丸、三ノ丸とした。郭の間は、深くて急な空堀を堀って絶ち切り、橋で継ぐ。又全山を見渡せるニノ丸には、丸太を組んで望楼を築いた。

山を攻め登る時、谷は浸食された、急な斜面を成し、登り難い。山の尾根に取り着いて、ここを伝へば容易に登れる。此所を防がねばならぬ。山頂より麓迄尾根は四方に伸び、下る。その要所に小さな郭を設け、柵を立てて防ぎとした。

戦となれば、陣営山の木を伐り払って見張らしを良くする。又その木で郭に柵を巡らし、仮小屋を建てるのである。

家は栄へ、守護代となった。本丸以下は、周囲に土塁を掲き固め、要所は石垣で補強し、上に柵を並べた。中には城番を置く小屋、米、武器を納める倉庫等、恒常的な建物を建てる。四周の尾根には、小郭の数を増やし、階段状に幾つもの小郭が並ぶ景観となった。上下の郭は梯子や、狭く急な通路で連絡する。本丸以下を取り巻く、此等多くの小郭により防備は飛躍的に増し、収容し得る人員も大幅に増した。

一国の大名となり、麓の居館を城に移した。本丸以下を石垣で固め、狭間を開けた塀を巡らし、要所には矢倉を上げる。各郭には、城主の館の他、米蔵、金蔵、馬小屋等、或いは寺、多くの家臣の掾屋敷等を設け、山城は多くの人々の生活の場となった。

徳川氏の時代となった。城は今や大名の居

所であると共に、政庁でもある。街道より離れた此地は、交通の面、生活の面で平地部より遥かに不便であった。城主は平野部に城を移し、山城は捨てられる事となった。建物や石垣の石は、新城建設の為大部分持ち去られ、城は荒れた。

やがて一国一城令により、城は破却される事となる。石垣は崩され、空堀は埋められた。全山を木々が覆い、何時しか人々の記憶からも消へ去った。

昭和 57年12月11日 発行

¥80

編集 備陽史探訪の会　城郭研究部